モングォル語 英 Monguor, 中 土族(Tǔzú), 露 монгорский язык

［概　説］　中国の青海省，互助土族自治県と民和回族土族自治県を中心に居住する土(トウ) (tǔ) 族によって話されているモンゴル系の言語.

話者数は，推定で，十数万人である.

固有の文字をもたず，書記には，中国語(漢字)を用いてきたが，1979年から，互助土族自治県で，ローマ字アルファベット(26文字)を使った文章語の普及を試み，1988年に，これを正式の文章語として採用した.

民族名の「土(トウ)」は，新来の移住民に対して，この民族が，古くからその土地に住んでいた住民であることをさした，「土着」の意味の中国語に由来する．ヨーロッパ人の旅行記などでは，チベット人側からの呼称「ジャホル(Dchiahour)」(<チ．rgya hor)や，モンゴル人側からの呼称「ダルダ (Daldi)」ないし「ドルド(Dolot)」などとして紹介された．また，Tujen, Turen, To Run などの表記もあるが，これらは，「土人(tǔrén)」を写したものである.

土族の民族名の自称は，[moŋɢu̯ol] あるいは [moŋɢu̯or] である．また，自らを [tɕʻiɢaːn moŋɢu̯ol] (「白モンゴル」の意)とも称するが，これは，モンゴル高原のモンゴル人をさす [xara moŋɢu̯ol] (「黒モンゴル」の意)に対する自称である．他方，[moŋɢu̯or] のように，音節末に r が現われるのは，1920年代に，スメトとモスタールト(A. de Smedt et A. Mostaert)が調査記述したナリンゴル (Naringol) 方言 (互助方言中の下位方言) の特徴であるが，これが，長らく，この言語に関して信頼できる唯一の研究であったために，言語名として，一般に通用してきた.

土族の居住地は，青海湖の東部を黄河の支流として東に流れる湟水の流域，および，その支流域に集中している．行政区では，青海省の互助土族自治県と民和回族土族自治県を中心とするが，このほか，青海省の，大通回族土族自治県，同仁県，楽都県，甘粛省の天祝，永登，臨夏にも，土族が居住する．土族の人口は，1982年の統計で，15万9,426人である．しかし，青海省大通回族土族自治県の土族は，すでに中国語だけを用い，また，青海省同仁県の約6千人の「土族」によって話されているのは，モングォル語ではなく，保安(バオアン)語の1方言である(→保安語).

土族は，伝統的に，チベット仏教(ラマ教)を信仰してきたため，文化的には，チベットと関係が深い.

モンゴル語の周囲には，東郷(ドゥンシャン)語，保安語，シラ・ユグル語といった，モンゴル系の孤立的諸言語があるが，モンゴル語は，それらの中で，すでに，1920年代末から行き届いた記述が行なわれたという点で，例外的な位置を占める．それは，上記，スメトとモスタールトによる，音論(1929–30)，辞書(1933)，文法(1945)の3部作によるもので，それらは，モンゴル学研究史上の不滅の業績となっている．その後，1955年に，中央民族学院などによって行なわれた中国内のモンゴル系諸言語，諸方言の調査では，それまでモンゴル語と同一視され，あるいは，混同されてきた周辺諸言語との関係，および，モンゴル語内部の方言関係が明らかにされた(これに関しては，「シロンゴル・モンゴル語」の項を参照されたい)．さらに，1980年には，内蒙古大学蒙古語文研究所により，中国内のモンゴル系諸言語，諸方言の調査の一環として，モンゴル語の言語調査が実施され，約6千項目を含む語彙集『土族語詞彙』(呼和浩特，1986)をはじめ，日常会話，民話，詩歌，諺，謎々等の口語資料を採録した『土族語話語材料』(呼和浩特，1988)等が，刊行されている．また，モンゴル語による神話，民話，歌謡などの口碑テキストが，シュレーダー(D. Schröder)によって，採集，公刊されている(「参考文献」を参照)．

[言語特徴]　モンゴル語は，モンゴル諸語の中で，いずれの言語ともかけ離れた，「孤立的」言語の1つに数えられる．他のモンゴル系諸言語と比較して，モンゴル語の際立った特徴は，チベット語や，とりわけ，中国語からの借用語が，語彙の大きな部分を占めていること，そして，音声的，文法的にも，それらの影響によって生じたと考えられる大幅な改新がみられること，さらに，その一方で，他の諸言語では失われた，若干の古風な言語的特徴が保持されていること，である．

改新的特徴のうち，主要なものを列挙すれば，まず音声面では，次のような点があげられる．

1）母音体系が単純化しており，後舌の円唇母音に対立する，前舌の円唇母音の系列がない．

2）母音調和がない．

3）強勢が，語末の音節の母音におかれる．

4）3に関連して，語頭音節の母音が弱化し，あるものは，消失した．その結果，語頭に，一連の子音連続が現われる．

文法面では，一般に，文法形態が単純化していることを指摘することができる．その具体的な例としては，次のようなものがある．

1）母音調和の欠如と相まって，曲用・活用語尾が，母音の交替による異形態をもたない．

2）名詞の格変化で，属格形と対格形が同じ接尾辞をとり，同形となる(他方，人称代名詞の1人称・2人称単数では，与格形と対格形が同形となる)．

3）動詞の受動態を形成する特別な接尾辞がなく，受動態は，使役形と同じ形で表わされる．

他方，モンゴル語に保持されている古風な特徴としては，次のような点が目立つ．

1）中世蒙古語の諸文献に見いだされ，現代の多くの方言では失われた語頭の摩擦喉音 h が，f, x などの子音として保持されている．

2）動詞の現在時制形を形成する接尾辞 -m，目的副動詞を形成する接尾辞 -ra (～-la)を用いる．

3）中世蒙古語に現われ，現代の多くの方言にはみられない語彙が保持されている．

モンゴル語	中世蒙古語
xṯ̄li-「(動物が)走る」	ha'ul-
turmā「蕪(かぶ)」	turma
šdžōdzi「木」	hičesün　'柳'

モンゴル語内部の言語的差異に目を向けると，大きく2つの方言を区別することができる．1つは，青海省互助土族自治県に行なわれる互助方言であり，他は，同省民和回族土族自治県に行なわれる民和方言である．両方言間の差異は，比較的大きく，相互理解が困難なほどである．

さらに，互助方言内部の下位方言としては，スメトとモスタールトの記述した「ナリンゴル下位方言」と，その他(「東溝大庄」一帯の資料が主なので，仮に「東溝下位方言」としておく)とを区別することができる．なお，トダエワ(Б. Х. Тодаева, 1973)は，アラグワ(Aragwa)，フラン・ヌラ(Fulan nula)，ゴロン(Golong)などの下位方言名をあげているが，判定するに足る十分な資料が呈示されているわけではないので，この説はとらない．

以下の説明は，主として，スメトとモスタールトの記述に基づいたものである．

[音　韻]　母音には，短母音と長母音の区別がある．

短母音は，i, e, a, o, u という5つの音素からなる．それぞれの基本的な音価と，主なヴァリアント(異音)は，次のとおりである．

i [i] 前舌非円唇狭母音：後寄りの異音 [ɨ～ə] は，主として，s, ts, dz, š, tš, dž の後に現われる．

e [e～ɛ] 前舌非円唇中母音．しばしば，わたり母音 [i] を前に伴って，[ⁱe]～[ⁱɛ] と発音される．

a [ɑ] 後舌非円唇広母音：š, tš, dž, j の後，および，n に終わる閉音節では，前寄りの異音 [æ] が現われる．

o [ɔ] 後舌円唇半広母音．しばしば，わたり母音 [ᵘ] を前に伴って，[ᵘɔ]～[ᵘʌ] と発音される．

u [u] 後舌円唇狭母音：š, tš, dž, j の後では前寄りの [y], G の後，もしくは，G と r, m にはさまれる位置では，広めの異音 [o] が現われる．

長母音には，それぞれの短母音に対応する，ī, ē[ⁱeː], ā, ō [ɔː～ᵘoː～ᵘəː], ū に加えて，後舌円唇半狭の ụ̄ [oː] がある．

dō [dɔː～dᵘoː]「堆積」，dū [duː]「枡」，dụ̄ [doː]「声，歌，音」

二重母音には，ia, ua, ie, ue のほか，uā, iū, eū, aū, eī, uī, aī があるが，いずれも後続の母音が主音となる，上昇(ascending)二重母音である．

子音は，p, t, k ; b, d, g, G ; m, n, ŋ ; r, l ; w, j ; f, s, x ; š, ṣ, tš, dž ; dz (ts ; ṭṣ, ḍẓ, ẓ) からなる．カッコ内の音は，もっぱら中国語とチベット語からの借用語に現われる．IPA (1979 年改訂版) の表記では，š, tš, dž は [ɕ, tɕ', tɕ] に，ṣ, ṭṣ, ḍẓ, ẓ は，それぞれ，そり舌音の [ʂ, tʂ', tʂ, ʐ] にあたる．また，p, t, k, tš, ts, ṭṣ [p', t', k', tɕ', ts', tʂ'] は無声有気音の系列，b, d, g, G, dž, dz, ḍẓ [p, t, k, q, tɕ, ts, tʂ] は無声無気音の系列である．

強勢は，語末の音節の母音におかれる．

母音調和は，語幹内と若干の派生接尾辞に，その痕跡が認められる程度で，曲用および活用の語尾には及ばない．例外的に，互助方言では，動詞の分離副動詞を形成する語尾の母音が，語幹の母音に応じて，ā～ē～ō と交替する．

音節構造の特徴として，子音連続で始まる語が少なくない点が目立つ．

モングォル語		蒙古文語形
ndaG a	「誓い」	andaγai
ṣdi	「歯」	siḍü(n)
rdem	「学識」	erdem

[文　法]　文法的語形変化は，語幹にさまざまな接尾辞が接尾することによって実現される．語形変化に際して，人称代名詞では語幹の交替があるが，それ以外は，語幹末の短母音が脱落する程度で，語幹の変化は少ない．

文法的語形変化は，名詞類の曲用と動詞類の活用に大別される．

名詞類の語形変化には，1）複数，2）格，3）所属の3種類があり，それぞれ，語幹に次の語尾が付くことによって実現される．

1）複数語尾：-sgi, -ŋgula

mori「馬」— mori-sgi「馬(pl.)」

kun「人」— kun-sgi, ku-ŋgula「人々」(後者では，語幹末の n は脱落する)

2）格語尾

主　格	-φ(ゼロ)	mori	「馬が」
属・対格	-ni	mori-ni	「馬の，馬を」
与　格	-du	mori-du	「馬に」
位　格	-re	mori-re	「馬のところに」
奪　格	-dza	mori-dza	「馬から，馬より」
造　格	-ra	mori-ra	「馬で」
連帯格	-la	mori-la	「馬と」

3）所属語尾には，再帰所属と人称所属の2種類がある．いずれも格語尾の後に付く．

再帰所属語尾：-nā「自分の～」

mori-du-nā「自分の馬に」

mori-ra-nā「自分の馬で」

属・対格では，語幹に直接 -nā だけが付く．

mori-nā「自分の馬の，自分の馬を」

人称所属語尾：-ni「彼(ら)の」(3人称)

mori-ni「彼(ら)の馬は」

mori-ni-ni「彼(ら)の馬の，彼(ら)の馬を」

mori-du-ni「彼(ら)の馬に」

1人称と2人称の人称所属語尾はないが，人称代名詞の属格形 muni「私の」，tšini「君の」が，名詞の後におかれることがある．

代名詞も，名詞と同様の複数語尾と格語尾をとるが，1人称と2人称の人称代名詞には，次のような特異点がある．

1）語幹の交替がある．

2）単数では，対格形が属格形と異なり，与格形と融合する．また，1人称複数の代名詞では，包括形(inclusive)と排除形(exclusive)の区別がない．1人称と2人称の単数では，次の表のような3つの語幹に基づき，位格形では属格形がそのまま語幹となり，その他の格(奪格，造格，連帯格)では，与・対格形がそのまま語幹となって，それぞれの格語尾が接尾する．

(単数)	1人称	2人称
主　格	bu	tši
属　格	muni	tšini
与・対格	ndā	tšimī

muni-re「私のところに」，ndā-dza「私から，私より」，tšini-re「君のところに」，tšimī-la「君と」

1人称と2人称の複数代名詞では，変化がより複雑である．まず，budasgi「私たちは」，tasgi「君たちは」という語幹形は，位格を除いてすべての斜格形の語幹となり，対格形は属格形と同形となる．

また，次の表のような形もあり，属格形は，そのままで位格形の語幹となり (ndāni-re「私たちのところに」; tani-re「君たちのところに」)，与格形の -du をとり去った形(ndās-, budas-; tas-)は，奪格形の語幹となる(ndās-dza, budas-dza「私たちから」; tas-dza

「君たちから」). さらに, 1人称複数には, 主格と位格以外の格形の語幹となる, ndāsgi- という形もある.

(複数)	1人称	2人称
主格	buda	ta
属格	ndāni	tani
与格	ndās-du, budas-du	tas-du

3人称の代名詞には, 指示代名詞の遠称形 (te「あれ」, tesgi「あれら」)が用いられる.

指示代名詞には, 近称 ne「これ」と遠称 te「あれ, それ」の2種類があり, それぞれ, 名詞と同様の複数語尾と格語尾をとる.

基本的な数詞は, 次のとおりである.

「1」 nige 「2」 Gōr 「3」 Gurān
「4」 dēran 「5」 tāwin 「6」 džirGōn
「7」 dolōn 「8」 nēman 「9」 šdzin
「10」 xarwan ～ xaran 「20」 xorin ～ xorim
「30」 xodžin 「40」 tedžin 「50」 tajin
「60」 džiran 「70」 dalan 「80」 najan
「90」 jerin 「100」 džoŋ 「1,000」 miŋxan
「10,000」 tumēn

合成数詞は, 日本語と同様, これらを連ねてつくる.

nige tumēn Gōr miŋxan Gurān džoŋ tedžin tāwin
「1 万 2 千 3 百 40 5」

動詞の活用には, 1) 命令形, 2) 終止形, 3) 形動詞形, 4) 副動詞形があり, それぞれ, 次の語尾が語幹に接尾する(例: 動詞語幹 kile-「話す」).

1) 命令形

命令 -φ(ゼロ) : kile 「話せ」
意志 -ja : kile-ja 「話そう」
容認 -ragi : kile-ragi 「話させておけ」

2) 終止形

過去 -wa : kile-wa 「話した」
現在 -m : kile-m 「話す」
未来 -guī : kile-guī 「話す」

3) 形動詞形

完了 -dzan : kile-dzan 「話した～」
習慣 -džin : kile-džin 「(いつも)話す～」
予定 -gu, -gun : kile-gu 「話す～」

形動詞形は, 名詞を修飾するほか, 「～する(した)こと」という意味で, 名詞と同じように, 格語尾や所属語尾をとり, また, ある場合には, 補助動詞 a, i を伴って, 文の述語となる. 予定形の -gun は, 補助動詞 a, i とともに, 文の述語として用いられる.

fudzu gē-gu sawā
水(を) 入れる 容器

fugu-dzan kun
死んだ 人

uro-džin ude
入る 門(入口)

yō-gu-ni mude-m
縫うこと(裁縫)を 知っている

turo-dzan-dza xuēno
生まれた(時)から 後

bu awu-gun a.
私が 買い ます

bu te mori awu-dzan a.
私は その 馬(を) 買いました

4) 副動詞形

連合 -n : kile-n 「話し…」
並列 -dži : kile-dži 「話して…」
分離 -ā/-ē/-ō : kil-ē 「話して(から)…」
条件 -dza : kile-dza 「話せば…」
即刻 -gulā : kile-gulā 「話すや…」
限界 -dilā : kile-dilā 「話すまで…」
目的 -ra : kile-ra 「話すために…」

(注: 分離副動詞 -ā/-ē/-ō は, 後に -ni を伴って, -āni/-ēni/-ōni という形でも用いられる)

副動詞形は, 等位節の述語となって文を中止し, あるいは, 従属節の述語となって, 主文の動詞を修飾する.

tši mori-ni fujā-ā ger dōro re.
君は 馬 を つないで 家 に 来い

te kun ana-dza ana-gun a.
あの 人は 治る(もの)なら 治り ます

tši ntirā-gulā bu sagi-ja.
君が 眠っ たら(すぐ) 私が 見張ろう

xara ōli-dilā sagi.
暗く なるまで 見張れ

連合, 並列の副動詞は, 副詞的に動詞を修飾して, 様態を表わし, また, 補助動詞 a, i と結合して, 述語となる. その際, 「連合副動詞 -n+a(i)」は, 動作が進行中であることを表わし, 「並列副動詞 -dži+a(i)」は, 動作が完了したことを表わす.

bulē diginē-dži nādi-n a.
子供たちは 片足跳びをして 遊んでい ます

funi Gari-n a.
煙が 出てい ます(現在進行)

soni ōli-dži a.
夜に なり ました(完了)

これらの否定は, 連合, 並列の副動詞の後に, uguā, uguī を付けて表わす.

bu awu-ŋguī (<awu-n uguī). 「私は取らない」
bu awu-dži uguā. 「私は取らなかった」

動詞の態には，1）使役態（接尾辞 -rGa-）と，2）共同態（接尾辞 -rdi-）がある．受動態を形成する特別な接尾辞はない．

şinē-「笑う」— şinē-rGa-「笑わせる」

ala-「殺す」— ala-rdi-「殺し合う」

モングォル語には，保安(バオアン)語やシラ・ユグル語と同様，話者が，叙述内容を，自己の経験内のことがらとして表現するか，あるいは，自己の経験外の客観的な事実として表現するかによって，2つの陳述様式がある．この機能を担っているのは，陳述の補助動詞 a（母音および G, g, ŋ の後では，wa）と i である．i は，話し手の経験内のことがら，判断に関係する陳述に，a(wa)は，客観的な事実の陳述に用いられる．a(wa) および i は，繋辞動詞としても，また，「ある，いる」を意味する存在動詞としても用いられる．

bu ndirē i. ⟷ te tirē wa.
私は ここに います それは あそこに あります
ne muni i. ⟷ ne tšini wa.
これは 私の です これは 君の です
budasgi malaŋ šdži-gun i.
私たちは 明日 行き ます
⟷ tesgi malaŋ šdži-gun a.
彼らは 明日 行き ます

文は，述語動詞を中心に構成される．述語動詞は，補語の存在を前提とする繋辞動詞と，それ以外の一般動詞に大別される．繋辞動詞は，(主語)＋補語＋繋辞動詞，の文成分で文を構成し，一般動詞は，主語や目的語をはじめ，他の文成分を支配して，文を構成する．

語順は，修飾語が被修飾語の前におかれ，支配する語が，支配される語の後に位置する．前置詞はなく，後置詞を用いる．

ne sēn mori wa.
これは いい 馬 です
ndā uri šge wa.
私には 借金が たくさん あります
bu te dondoG-ni nojōn-ra
私は その 事件 を 役人 を介して
burāGa-wa.
決着をつけた

疑問詞には，次のようなものがある．

kan「誰」，jān「何」，ali「どれ，どの」，kidi「いくつ(の)」，jamu「どんな」，kidžē「いつ」，andžī「どこ(に)」

疑問詞を用いない疑問文(Yes-No 疑問文)では，文末に疑問の助詞 u を付して，疑問を表わす．u は，繋辞動詞 a(wa) の後では nu となり，同様に，繋辞動詞 i の後では ju となる．

šdžōdzi sēn a nu? (sēn i ju?)
(その)木は いい です か
taš xadoŋ wa nu?
(その)石は 硬い です か

動詞の禁止は，命令形の直前に bī をおいて表わす．

bī kile.「話すな，言うな」

その他の動詞の否定には，活用形の前に，否定の副詞 si, ī, lī をおく．一般に，si は，過去時制の動詞とともに，ī, lī は，現在および未来の時制の動詞とともに用いられる．

bu dirāsi-ni si ōtši-wa.
私は 酒 を（否定）飲ん だ(＝飲まなかった)
bu ī tani-n i.
私は（否定）知って いる(＝分からない)
buda lī šdži-m.
私たちは（否定）行く(＝行かない)

存在・繋辞の否定は，uguī, buši「～がない」「～でない」によって表わす．これらは，補助動詞 a (wa), i と結合して，(u)guā, (u)guī; bušia ～ bušiā, buši ～ bušī として現われる．

ne širē mulā guā.
この 机は 小さく ない
ne ger muni-ni bušia.
この 家は 私のもの でない
ndā ger uguā.
私に(は) 家が ない

［方 言］ 既述のように，モングォル語は，青海省の互助土族自治県に行なわれる互助方言と，同省民和回族土族自治県(三川(サンチュアン)地方)に行なわれる民和方言に大別される．両方言間の差異は大きく，その主な相違点を列挙すれば，次のようになる（主に，照那斯図，1981 による）．

1）互助方言には，母音の長短の対立（短母音と長母音の区別）があるが，民和方言にはこの区別がなく，短母音のみである．

互助方言	民和方言
tāda	tada「近い」
xurā	qura「雨」
tōdzi	tosi「油」

2）子音に関しては，両方言間に，次のような対応がある．

互助方言	民和方言
x	q（口蓋垂破裂音）
f	x
m(音節末の)	n, ŋ
l（音節末，東溝下位方言）	r

次に，具体例をあげる．

互助方言	民和方言	
xaloŋ	qaluŋ	「熱い」
fulān	xulaŋ	「赤い」
xurim	quriŋ	「婚礼」
lom	luan	「経典」
ɢal (東溝) ɢar (ナリンゴル)	ɢar	「火」

3）互助方言に比べて，民和方言では，語頭に立つ子音連続の種類が少ない．言い換えれば，民和方言では，互助方言ほど，第1音節の母音の脱落が多くない．

互助方言	民和方言	
ndur	undur	「高い」
šdžā-	artši-	「荷を積む」

4）概して，互助方言ではチベット語からの借用語が多く，民和方言では中国語からの借用語が多い．

互助方言	民和方言	
sēr(<チ. gser)	tšar(<中 銭児 qiánr)	「金銭」
gāra(<チ. ka-ra)	taŋ(<中 糖 táng)	「糖」

[辞　書]

Smedt, Albert de et Antoine Mostaert (1933), *Dictionnaire Monguor-Français* (Le dialecte monguor parlé par les Mongols du Kansou occidental, IIIe partie, Pei-p'ing)——モンゴル語-フランス語辞典．モンゴル語は発音記号で表記され，主見出し語は約5千．モンゴル系の単語には，対応するモンゴル文語形が，また，チベット語や中国語等からの借用語には，もとの言語の語形が添えられ，巻末には，モンゴル文語形の索引が付されている．

哈斯巴特爾 等編(1986)，『土族語詞彙』(蒙古語族語言方言研究叢書014，内蒙古人民出版社，呼和浩特)——モンゴル語－中国語語彙集．見出し語数は約6千(副見出しを含む)．モンゴル語は IPA による発音記号で表記され，配列は，伝統的なモンゴル文語の配列方式に準じている．モンゴル系の単語には，対応するモンゴル文語形が，また，借用語には，チベット語や中国語のもとの言語の語形が付されている．

李克郁 編 (1988)，『土漢詞典 (Mongghul Qidar Merlong)』(青海人民出版社，西寧)——ローマ字正書法による，モンゴル語文章語辞典．見出し語数は，副見出し(熟語)を含めて，約1万4千．

[参考文献]

Smedt, Albert de et Antoine Mostaert, "Le dialecte monguor parlé par les Mongols du Kansu Occidental, Ière partie : Phonétique", *Anthropos*, XXIV, 1929 ; XXV, 1930 ; Addenda et corrigenda, XXVI, 1931 (Wien)

——— (1945), *Le dialecte monguor parlé par les Mongols du Kansou occidental*, IIe partie : *Grammaire* (Monumenta Serica, Monograph Series VI, The Catholic University of Peking ; 1964², モスタールトによる「第2版序」を付けた復刻版 : Indiana University Publications, Uralic and Altaic Series Vol. 30, Mouton, The Hague)

Schröder, Dominik (1964), "Der Dialekt der Monguor", *Handbuch der Orientalistik*, I. Abt., V. Band, II. Abschnitt : *Mongolistik* (E. J. Brill, Leiden/Köln)

Róna-Tas, A. (1966), *Tibet-Mongolica. The Tibetan Loanwords of Monguor and the Development of the Archaic Tibetan Dialects* (Akadémiai Kiadó, Budapest)

Тодаева, Буляш Хойчиевна (1973), *Монгорский язык* (Наука, Москва)

照那斯図 (1964)，「土族語概況」『中国語文』1964年第6期(北京)

——— (1981)，『土族語簡志』(中国少数民族語言簡志叢書，民族出版社，北京)

照那斯図，李克郁 (1982)，「土族民和方言概述」『民族語文研究文集』(青海民族出版社，西寧)

斎藤純男(1983)，「モンゴル語の音韻体系」『言語・文化研究』創刊号（東京外国語大学大学院外国語学研究科言語文化研究会）

席元麟 (1986)，「土族語音位系統」『中国民族語言論文集』(四川民族出版社，成都)

照那斯図 (1987)，「土族語」『中国少数民族語言』(四川民族出版社，成都)

なお，口碑テキストには，次のものがある．

Schröder, Dominik, *Aus der Volksdichtung der Monguor*, 1. Teil (1959) : *Das weiße Glücksschaf* (*Mythen, Märchen, Lieder*) ; 2. Teil (1970) : *In den Tagen der Urzeit* (*Ein Mythus vom Licht und vom Leben*) (Otto Harrassowitz, Wiesbaden)

Geser Rëdzia-Wu (Dominik Schröders nachgelassene Monguor (Tujen)——Version des Geser-Epos aus Amdo in Facsimilia und mit einer Einleitung herausgegeben von Walther Heissig) (Otto Harrassowitz, Wiesbaden, 1980)

清格爾泰 等編 (1988)，『土族語話語材料』(蒙古語族語言方言研究叢書 015，内蒙古人民出版社，呼和浩特)

[参　照]　シロンゴル・モンゴル語，保安語，モンゴル諸語

(栗林　均)